

Title	非戦・平和の思想家 住谷天来の研究
Author(s)	大崎, 厚志
Citation	2014 年度 博士論文 要旨
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/repos/modules/xoonips/detail.php?item_id=5495
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

2 0 1 4 年 度

論文博士
＜要旨＞

主 題

非戦・平和の思想家 住谷天来の研究

聖学院大学大学院
政治政策学研究科
(修士課程修了)

群馬県前橋市 大崎 厚志

聖学院大学大学院 論文博士 要旨

1. 本研究の概要

住谷天来^{すみやてんらい}〔幼名を弥作、号を八朔^{やさく}〕（1869～1944）は、群馬県群馬郡国府村東国分（現群馬県高崎市東国分）に生まれた。出身は地域でも素封家の農家の次男であった。実家近くの国府小学校に学び、農業に従事するも、学問に興味を持ち前橋の幽谷義塾に学ぶ。ここで生涯の友となる共立普通学校（現群馬県立大間々高校）の創設者、井上浦造と出会う。二人とも、前橋教会にて新島襄門下の不破唯次郎から洗礼を受け、キリスト者となった。また、「上毛青年会」に参加。当時群馬県下を中心に展開していた廃娯運動に熱心に参加した。その後、上京し、早稲田・慶応義塾に学ぶ。上州に帰郷後は、「上毛青年会」の機関誌、『上毛之青年』に自己の主張を発表する傍ら、前橋の上毛共愛女学校の教師としても地域の教育に貢献した。上毛共愛女学校を退職後、上京。明治29年（1896）、夏、基督教青年会第8回夏期学校（静岡県興津）に参加し、内村鑑三と出会う。内村との出会いをきっかけに、松村介石らとともに雑誌『警世』の編輯人となり、盛んに自己の主張を載せジャーナリストとしても活躍した。明治33年（1900）、カーライル著『英雄崇拜論』を翻訳。明治36年（1903）には、内村主筆の『聖書之研究』に「墨子の非戦主義」を載せ、非戦論を展開する。また、『十九世紀之豫言者』を刊行し、カーライル、ラスキン、トルストイを取り上げ、紹介している。日露戦争前のトルストイの紹介は、天来の非戦論の主張との関連において注目される。

明治38年（1905）頃には、故郷の上州へ帰郷。明治42年（1909）、『詩聖ダンテの教訓』を翻訳、明治44年（1911）、『孔子及孔子教』を著す。また、この頃井上浦造の創設した「共立普通学校」の教師となる。キリスト者としては、明治末期に伊勢崎教会の牧師となる。大正7年（1918）には、甘楽（富岡）教会の牧師となり、地域の伝道に努めた。また、同郷の非戦論者・柏木義円の『上毛教界月報』にも投稿、非戦論を展開した。昭和2年（1927）には、『聖化』を創刊。軍国主義が強まり、戦時体制下に非戦・平和の言論を展開するも、昭和14年（1939）、官憲の圧力で筆を折るに至った。『聖化』の廃刊については、当時の矢内原忠雄、塚本虎二らがその廃刊を惜しんだ。住谷天来の生涯や思想については、そのトータルな研究が少ない。地元、群馬県内では、その存在が顕彰され、調査も進みつつあるが、未だに不明な部分も多い。本稿では、住谷天来の生涯を追い、「非戦・平和」を叫び続けたその思想形成を解明したい。

2. 本稿の構成

本稿は、2部構成とし、全体を論述する。

第1部においては、「住谷天来の生涯と思想形成」について概観する。第1部は4章に編成する。第1章の「住谷天来の生きた時代」では、天来の幼少期から、前橋に出て幽谷義塾・前橋英学校などに学ぶ修学期、同じくキリスト教思想の受容（前橋教会での受洗）、「上毛青年会」への入会と廃娼運動への参加、「上毛共愛女学校」教師時代を概観する。第2章の「内村鑑三との出会いと東京時代」では、上京した天来が、内村鑑三と出会い大きな影響を受け、ともに上州出身者として意気投合し、雑誌『警世』、『聖書之研究』などの編集にかかわる。また、この頃に『英雄崇拜論』や『十九世紀之豫言者』などの翻訳を出版している。この東京時代は、主にジャーナリスト、翻訳者として活躍した。第3章の「上州に生きる」では、帰郷し、教育や著述に活躍した天来の姿を描く。天来は、親友井上浦造が創設した「共立普通学校」の教師となる。また、この頃『詩聖ダンテの教訓』、『孔子及孔子教』などの著書を刊行した。第4章の「キリスト者として」では、群馬県内（前橋教会など）においてキリスト教の伝道を始め、「伊勢崎教会」、「甘楽（富岡）教会」の牧師として活躍する天来の姿を描く。「甘楽教会」においては、『聖化』（1927年）を創刊した。『聖化』は、天来が「非戦・平和」の言論を主張したジャーナルとして注目される。しかし、『聖化』は戦時色が濃くなる昭和14年（1939）に、ついに官憲の圧力により廃刊にさせられた。その後、天来は昭和19年（1944）に没する。

第2部においては、「住谷天来の思想」について考察する。第2部は大きく2章に編成する。第1章では、「住谷天来の社会思想」について論述する。『上毛之青年』は、青年期の天来がその編集にかかわった雑誌である。『警世』は、天来がジャーナリストとして、社会批判を主に展開した雑誌であった。また、「上毛共愛女学校」や「共立普通学校」の教師としても活躍した天来の「教育観」についても考察して見る。

第2章においては、「住谷天来の非戦・平和思想」について論述する。「1. 同時代のキリスト者の非戦・平和思想」では、木下尚江、深澤利重、柏木義円、内村鑑三の「非戦論」を取り上げ、住谷天来の「非戦論」との対比を試みる。「2. 住谷天来の非戦・平和思想」では、住谷天来の「非戦論」の特色、特に「キリスト教思想（トルストイの平和思想）」・「墨子の非戦論」について分析して見る。そして、天来の初期の平和思想から、『聖書之研究』・『聖化』などの論稿を読み天来の「非戦・平和思想」の軌跡を考察する。

3. 住谷天来の生涯と思想形成

住谷天来は、明治維新後の上州の農家に生まれ、明治・大正・昭和の三時代を生きた。かれの生涯は、いくつかの時代に区分される。幼少期の群馬県国府村（現高崎市）時代。幽谷義塾、前橋英学校などで学んだ前橋時代。また、この頃前橋教会にてキリスト教を知り、新島門下の不破唯次郎（同志社卒）から受洗し、以後クリスチャンとしての生涯を送った。そして、「上毛青年会」に属し、当時群馬県内で盛んになっていた廃娼運動に取り組み活躍する。一時、上京し、早稲田・慶応義塾に学び帰郷。自由民権思想に触れていた天来は、雑誌『上毛之青年』の編輯にもかかわり、ジャーナリストとしてその活動を開始する。また、上毛共愛女学校（現共愛学園）の教師として、地域の女子教育に貢献した。

天来は、上毛共愛女学校を辞職後、再び上京し、終生交友を結ぶ内村鑑三と出会う。内村の『聖書之研究』の創刊にも協力した。天来自身も雑誌『警世』の編輯者（ジャーナリスト）として活躍し、当時の社会を批判した。さらには、カーライル『英雄崇拜論』の翻訳やM.A.ウォード『十九世紀之豫言者』、ジンスモア『詩聖ダンテの教訓』を翻訳。明治期の日本に、西洋思想・キリスト教思想の導入に努めた。

また、明治時代の天来は、日清戦争後から、日本の軍備拡張路線に反対する平和思想を『上毛之青年』に、あるいは『警世』に、日露戦争開戦前には、「墨子の非戦論」を『聖書之研究』などの雑誌に展開した。さらに、トルストイの平和思想などについても積極的に紹介していた。いずれにしても、天来はジャーナリストとして、また、キリスト者としての立場から非戦・平和思想を主張していた。上州に帰郷後は、親友井上浦造が創設した共立普通学校（現群馬県立大間々高等学校）などで教育者としても活躍した。

大正時代からの天来は、主にキリスト教会の牧師として、群馬県内の伊勢崎教会、甘楽（富岡）教会などで活躍した。キリスト教の伝道の傍ら、柏木義円の『上毛教界月報』などにも、非戦論を展開していた。

昭和時代に入って、天来は雑誌『聖化』を創刊する。この『聖化』こそ、当時の軍国主義の風潮に反対し、「自由」や「平和」を叫び続けた注目されるジャーナルであった。しかし、昭和14年（1939）天来は、官憲の圧力により、ついに『聖化』の筆を折らざるを得なかった。戦後、内村門下の南原繁が前橋の群馬会館で講演をした時に、『上州に入った時に思い出したのは内村鑑三と住谷天来のお二人である』と語ったという。

4. 住谷天来の平和思想

住谷天来の初期の平和思想として、『上毛之青年』（復刊）第2号（明治29年4月発行）に所収されている「仮装せる国民」には、次のような社会批判が述べられていた。

当時の明治政府について、天来は、「…八千万円の歳出入は足らずとして二億万円に近き予算を定め、其三分の一以上は一国の戸締りとして軍備の為に充つると聞く。是も亦欧州の文明に仲間入りを為せし者、強ち彼れの狂愚のみを笑う可らず。…」（『上毛之青年』（復刊）第2号所収）と述べていた。このことは、当時、日清戦争に勝利して、西欧の文明国の仲間入りを果たした日本が、西欧諸国のように、国家予算の多くを軍備の増強につぎ込み、軍備拡張の路線に至っていたことを批判していた。

なお、天来の「非戦論」の主張の背景には、大きく二つの平和思想の影響があった。それは、「キリスト教思想（なかでもトルストイの思想）」と「墨子の非戦主義」の主張であった。

上京後の天来には、終生交友を結ぶ内村鑑三との出会いがあった。天来は、内村鑑三主筆『聖書之研究』の創刊にも協力し、以後、キリスト教思想を中心に同紙にもたびたび寄稿した。特に天来の「非戦論」として注目されるのが、「墨子の非戦主義」（明治36年11月19日発行『聖書之研究』第46号所収）の論稿であった。「墨子の非戦主義」の論稿は、日露戦争開戦前の「非戦論」の主張として注目される。この天来の主張は、幸徳秋水や堺利彦らの社会主義者にも注目され、早速、『平民新聞』第3号（明治36年11月29日発行）に紹介された。

また、天来は、明治期の日本に、トルストイの思想を積極的に紹介していた。明治35年発行、トルストイ著・加藤直士訳『我懺悔』（警醒社刊）や明治36年発行、トルストイ著・加藤直士訳『我宗教』（文明堂刊）に「序文」を載せていた。また、明治36年発行、M. A. ウォード原著 住谷天来訳補『十九世紀之豫言者』（警醒社刊）に所収されている「トルストイ伯と其の福音」でも、トルストイの平和思想を取り上げていた。

その後も天来は、昭和2年（1927）、『聖化』を創刊し、キリスト教思想を根底にして、軍国主義の高まる天皇制国家権力のもとでも、「非戦・平和」を叫び続ける。しかし、昭和14年（1939）、官憲の圧力により『聖化』は廃刊に追い込まれ筆を折った。こうして、天来のペンの力（「自由」、「平等」、「平和」の叫び）は奪われたが、キリスト教への信仰は失わず、昭和19年（1944）1月にその生涯を終えた。

聖学院大学大学院
政治政策学研究科
(修士課程修了)

群馬県前橋市 大崎 厚志